

# 『言語の脳科学』訂正・追加表 酒井 邦嘉

## 再版の訂正・追加

- 図表の文字のカスレ。表2-1の【第二言語】、図5-2の【言語】・【生】、図6-2と図6-3の【上】・【前】、図13-2の【言語】
- 第2章扉 引用文の直後(…答えた。)に、【(『素粒子論の本質』より)】を追加。引用を明示する。
- p.30, 1.9 【逆に、】を【また、一般に動物行動の記録では、行動の起こる頻度が重要である。】
- 同 1.10 【驚異的な演出ができるだろう。】をトル
- 同 1.11 【と感心するだろうから、簡単にだまされてしまうことなる。】を【と思い込んでしまうからである。】
- p.44, 1.3 【Plato】を【Platon】 さらに、oの上に横棒を付ける
- p.68, 1.1 【一九〇八〜】を【一九〇八〜二〇〇〇】
- p.89 の引用文献(11)と(12)を入れ替える
- p.92, 1.4 【理学系の博士のことを】を【博士のことを理学系も含めて】
- p.92, 1.6 【言語の】をトル
- p.95, 1.6 【確立論】を【確率論】
- 第5章扉 引用文の直後(…いるのです。)に、【(学生に宛てた書簡より)】を追加
- p.244, 1.7 【致命的な】をトル
- p.268, 1.12 【など、すべてにわたって重大な欠陥】を【などに多くの問題】
- p.310, 1.4 【貴男】を【貴雄】
- p.315, 1.8 【クラッシュェン】を【クラッシュェン(S. D. Krashen)】
- p.326 引用文の直後(…だけだ)に、【("The two cultures", New Statesmanより)】を追加。雑誌名はイタリックで
- 奥付け 著者紹介の【96年】を【95年】
- 索引の配列訂正。〈還元論〉と〈還元ヘモグロビン〉。〈接頭語〉と〈接続詞〉。〈パロール〉と〈ハリス〉
- 索引のノンブル接続。〈母語 319,320,321〉を〈319-321〉

## 第3版の訂正・追加

- p.217, 1.2 字下げをトル
- p.221, 1.10 【酸化】を【酸素化】
- p.221, 1.10 & 11 【還元】を【脱酸素化】、2つ
- p.223, 1.12 【酸化】を【酸素化】、【還元】を【脱酸素化】
- p.230, 1.6 【酸化】を【酸素化】、【還元】を【脱酸素化】
- p.229, 1.3 【前部】をトル、図9-1の説明でも同様に【前部】をトル
- p.257, 1.13 【かな】を【仮名】
- p.338 【伊藤正男】に27を追加
- p.339 【音程判断課題】をトル
- p.339 【仮名 73,186-188,232,233,257】を追加
- p.339 【漢字 19,73,186-188,232】を追加
- p.339 【還元ヘモグロビン】を【脱酸素化ヘモグロビン】として「た行」へ
- p.337 【酸化ヘモグロビン】を【酸素化ヘモグロビン】
- p.334 【立花隆 26,27】を追加
- p.334 【単語レベル】をトル
- p.334 【知覚弁別】をトル
- p.332 【プラトン】の43を44に
- p.330 【類別詞 268,269,280】を追加

## 第4版の訂正・追加

- p.81, 1.1 【working memory】の後に【:作動記憶】を追加
- p.93, 1.9 【ラテン語から】をトル
- p.93, 1.11 【ラテン語の】を【多くの】に換える
- p.306, 1.4 【ケース・スタディー】の後に【(事例研究法)】を追加

## 第6版の訂正・追加

- p.89の文献リストで、(11)は1986年、(12)は1984年

## 第7版の訂正・追加

- p.287, 1.11 【見なして他動詞主語と区別する「能格」という特徴が】を【見なして、他動詞主語と区別するという特徴が】
- p.287, 1.14 【犬が走る。】を【犬がいる。】
- p.288, 1.1-3は次に変更：【のような文の場合、犬とねずみを同じ格（絶対格）と見なして、猫は別の格（能格）とする。日本語では、主語である犬と猫を同じ格（主格）と見なして、目的語であるねずみは別の格（対格）とするが、これは言語によるパラメーターの違いの一例である。】
- p.339 【格 287,288】を追加
- p.339 【確率モデル 215】を削除
- p.210の最終行の【ハエの触覚】を【ハエの触角】

## 第8版の訂正・追加

- p.4, 1.13 【発信元】を【発信源】
- p.21, 1.6 【花子に本を貸した】を【言った】
- p.73, 1.2 【表しており、】を【表しており（「ん」・「っ」・「ゃ」などは例外）、】
- p.73, 1.3 【パターンをとる。】を【パターンが頻出する。】
- p.73, 1.7 【行けば、】を【行けば・】
- p.100, 図4-1 文献引用【(21)】を【(22)】
- p.105, 1.2 【\*My friend】を【\*A friend of mine】
- p.107, 1.4 【六、】をトル
- p.122, 1.6 【すでに出版されて】を【すでにいくつか出版されて】
- p.122, 1.7 文献引用【(20)】を【(20)(21)】
- p.124, 1.1 文献(15)は邦訳を削除して【J. R. Taylor, "Linguistic Categorization - Prototypes in Linguistic Theory", 2nd Edition, Oxford University Press (1995)】"タイトル"はイタリックで（引用符なし）
- p.124, 1.3 文献(17)の【(編)】をトル
- p.124, 1.7 文献【(21)】を【(22)】
- p.124, 1.7 文献【(21)中村捷、金子義明、菊池朗『生成文法の新展開－ミニマリスト・プログラム』研究社(2001)】を追加
- p.181, 1.2 【作っていた】を【作って結合していた】
- p.181, 1.5 【このようなクラスターが】を【別の種類のクラスターがすき間なく並んで】
- p.181, 1.6 【多くのコラム】を【多くの種類のコラム】
- p.236, 1.10 【御座なり】を【なおざり】
- p.327, 1.13 【言語治療士】を【言語聴覚士】
- p.330 【和田試験 177,268,292】を追加
- p.332 【パラダイム 224-226,236,245,247,293,319-321】を追加
- p.332 【皮質下核 175】を削除
- p.332 【文法エラー 143】を削除

## 第9版の訂正・追加

- p.58, 1.12-13 【つまり、意味がなくても文法がある文を作ることができる。】を【この文のように、今まで見たことのない文の文法性が判断できるという事実を行動主義では説明できない。】
- p.188, 1.4 【視覚】を【視力】
- p.188, 1.7 【病気であることがわかってきたので、】を【原因が考えられる場合は、】
- p.188, 1.8 【とも呼ばれている。読字障害は、】を【と呼ばれており、】
- p.337 【行動主義】に58を追加

## 第10版の訂正・追加

- p.45, 1.2 【わかるだろうか。】を【どうしてわかるのだろうか。】
- p.45, 1.2 【もしくは、】を削除
- p.45, 1.3-4 【日本語を母語とする人は、どうして【3a】が文法的でないのかを、説明できるだろうか。】を【「誰は」という例が与えられないことも理由にはならない。はじめて聞く名前に対しても「は」と「が」の両方が使えるからである。】
- p.45, 1.5 【だろう】を削除
- p.45, 1.8 【だろう】を削除

- p.80, 1.5-6 【意味がおかしくなって、】を【太郎が写真を撮ったという意味が成立しなくなってしまい、】
- p.122, 1.1 【ミニマリズム】を【ミニマリティ】
- p.122, 1.3 【ミニマリズム】を【ミニマリティ】
- p.227, 1.6 【単語レベルで】を【単語の記憶に基づいて】

#### 第11版の訂正・追加

- p.251, 1.1 次の一文と、その文末に文献引用(13)(14)を追加【ブローカ野が「文法中枢」としてはたらくことが、その後証明された。】
- p.254, 文献(13)(14)を追加【(13) R. Hashimoto and K. L. Sakai, "Specialization in the left prefrontal cortex for sentence comprehension", *Neuron* **35**, 589-597 (2002)】 【(14) K. L. Sakai, Y. Noguchi, T. Takeuchi and E. Watanabe, "Selective priming of syntactic processing by event-related transcranial magnetic stimulation of Broca's area" *Neuron* **35**, 1177-1182 (2002)】
- p.263, 小見出し【二つの手話】を【二つの「手話」】
- p.269, 1.8 【わかってきた】の文末に文献引用(21)を追加
- p.274, 文献(21)を追加【(21) K. L. Sakai, Y. Tatsuno, K. Suzuki, H. Kimura and Y. Ichida, "Sign and speech: Amodal commonality in left hemisphere dominance for comprehension of sentences", *Brain* **128**, 1407-1417 (2005)】

#### 第12版の訂正・追加

- p.12, 1.12 【『文法の構造』】を【『統語構造』】引用ルビはそのまま
- p.58, 1.8 【『文法の構造』】を【『統語構造』】引用ルビはそのまま
- p.34, 1.4 【少数の遺伝子】を【遺伝子のレベル】
- p.34, 1.4-5 【五%以上も異なること】を【大きく機能が異なるという可能性】
- p.36, 1.1 【直接の原因は、「話す」ことにある】を【ことで、「話す」ことに役立った】
- p.36, 1.1 【約十万年】を【数十万年】
- p.36, 1.2-3 【それよりもさらに昔の人類が話をしてきた可能性がある。】を【その頃の変化である。しかし、脳が十分進化していたなら、舌下神経や喉頭が発達しなくとも手話で話ができただであろう。】、「喉頭」にルビ「こうとう」
- p.147, 1.11 【百分の一か千分の一】を【約二千分の一】
- p.147, 1.11-12 【ので、今のところ抽出は不可能だろうと考えられている。】をトル
- p.147, 1.14-15 【六万年前の化石人類の人骨からDNAが抽出されたという報告があるが、これが細胞核のDNAだったらどんなによいだろうか。】を【しかし、科学の進歩はこれらの困難を克服し、ついにネアンデルタール人の骨から細胞核のDNA断片が抽出された。化石人類の遺伝子を調べることも夢ではなくなったのである。】
- p.147, 1.15 (20)の引用は、上の文「抽出された」につける
- p.147, 1.16 【としても】を【ならば】
- p.148, 1.1 【べられないのは残念である。】を【べることで、言語の生物学的な基盤が明らかになるかもしれない。】
- p.150, 文献(20)を入れ替え【(20) R. E. Green, et al., "Analysis of one million base pairs of Neanderthal DNA", *Nature* **444**, 330-336 (2006)】
- p.259, 1.8 【それは文化的背景が近いということにも関係しているのだろう。】を【それはピジン(第12章)であって、自然言語ではない。】
- p.266, 1.10 次の一文を追加【日本手話と書記日本語を基礎とする最初のろう学校は、二〇〇八年に開校した。】
- p.331 【モダリティ 231, 232】を追加
- p.331 【優性遺伝子】をトル

#### 第13版の訂正・追加

- p.7, 1.7 【reflexive】を【recursive】
- p.23, 文献(10)【Black Rose Books (1996)】を【*Expanded Second Edition*, AK Press (2004)】  
*Expanded Second Edition* はイタリック
- p.51, 1.5 【連想関係は偶然的】を【連想関係は主として偶然的】
- p.56, 文献(27)【Black Rose Books (1996)】を【*Expanded Second Edition*, AK Press 2004)】  
*Expanded Second Edition* はイタリック
- p.102, 1.4 【関係は恣意的】を【関係は、擬声語や擬態語(オノマトペ)などを除けば恣意】
- p.102, 1.4-5 【法則性は存在しない】を【法則性が乏しい】
- p.105, 1.10 【音韻の文法】を【音韻の規則】
- p.107, 1.7 【文法】を【規則】

- p.107, 1.8 【文法】を【規則】
- p.107, 1.10 【文法】を【規則】
- p.108, 1.2 【文法の規則】を【文法や規則】
- p.108, 1.3 【文法】を【規則】
- p.108, 1.4 【文法】を【規則】
- p.192, 文献(30) 【*Trends in Neurosciences*】を【*Nature*】
- p.193, 文献(30) 【(1999)】を【(1996)】
- p.235, 1.6 【日本人が】を【特定の人種が】
- p.273, 文献(13) 【Cornia】を【Corina】
- p.323, 文献(11) 【(1996)】を追加
- p.323, 文献(12) 【(1996)】を追加
- p.325, 文献(25) 【(1998)】を追加

#### 第14版の訂正・追加

- p.73, 1.16 【動詞】を【動詞の終止形】
- p.74, 1.1 【とることが多い】を【とる】
- p.74, 1.1 【高・低・低】を【高・低・低など】
- p.74, 1.2 【動詞はない】【動詞はない（母音が二つ続く場合は少数の例外がある）】
- p.126, 1.4 【遺伝行動学】を【行動遺伝学】
- p.158, 1.5-6 【一致しないことが知られている】を【必ずしも一致しない】
- p.158, 1.14 【なお、ブロードマンは後に11野の上半分を12野とした。】を追加
- p.337 【行動遺伝学 126】を追加
- p.337 【国際手話 259】をトル
- p.340 【遺伝行動学 126】を【遺伝子 126,127,145-149】
- 奥付 【訪問研究員】を【客員研究員】
- 奥付 【准教授】を【教授】

#### 第15版の訂正・追加

- p.173, 1.13 【はまだない】を【が必要である】
- p.173, 1.13 【弓状束の存在自体も、人間の】を【弓状束で】
- p.173, 1.14 【のを本当に確かめた人はいないという】を【ことは、拡散テンソルMRIという手法で確認されている】

#### 第17版の訂正・追加

- p.160, 1.10 【上側頭回後部】を【上側頭回と中側頭回の後部】
- 同 【22野】を【22野・21野の後部】
- p.266, 1.6 【ろう学校】を【ろう学校（特別支援学校）】
- 奥付 URLを以下に訂正：<http://mind.c.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>

#### 第18版の訂正・追加

- p.58, 1.8 【統語構造】を【統辞構造論】